

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

姦喜の姫武者

紫苑

〔しおん〕

小説 瀧澤 春

挿絵 高浜太郎

第一章	竜王の加護を受けし姫のこと	006
第二章	竜姫、呪われし肉華の種を身に受けるのこと	070
第三章	紫苑娼婦となりて肛悦に悶えるのこと	104
第四章	狂いの宴にて供物となるのこと	157
第五章	竜王の失墜と姫の最期のこと	204

登場人物紹介

Characters



つきみや し おん
月宮紫苑

竜王の血を受け継ぐといわれる月宮家の第十五代当主。一族でも特に武芸に秀でて、〈竜王の化身〉とも言われるほどの女丈夫。その身体には竜が身体に絡みついたような痕がある。

さいよく
犀玉

異形の女王。妖術使い。月宮一族と対立する隣国領主、法蔵一族に雇われて、紫苑籠絡を命じられる。

が おう
牙王

精力絶倫な鬼で犀玉の夫。肉欲の化身のような怪物で、犀玉以外の言うことを聞かない。イボ付きの特殊なペニスを持つ。

お腹の奥に感じる重量感に息が詰まりそうになり、眼窩がチリチリと熱くなる。

「分かるか、てめえの子宮ンなかにはいつているのがよっ」

子宮口をくぐり抜けられ、女性の命とも言うべき場所に埋め込まれる欲望の塊。イボに粘膜を削られ、脚が内向きに曲がった。膝当が擦れ合って金属音を奏でる。

「ううう……ああ、き、きてる……奥、……だめ、アア……ウウッ」

子宮に肉薄されたシヨックで、譫言を漏らす紫苑。少しでも身体を動かすとイボと接触して灯火がお腹のなかで陽炎のように揺れ、快美の小爆発が轟く。

「気なんか失うんじゃないぜッ!!」

最深部まで穿った勃起が引き抜かれる。イボが果肉にめり込んで、電撃が放射線状に子宮にまで響く。噴き出る愛液が発火し、胎内は淫らな灼熱感に揺らいだ。

「あつくうッ!？」

魂を削られるような発火感に、全身が太い血管にでもなったようにクンッ！と跳ね上がり、肩当てがガチャガチャと音を立てた。

「オラアッ!」

勃起の三分の二まで引き抜かれると再び、押し出されて子宮を磨かれる。胎内をかき混ぜられる衝撃は鋭く女体の生気を吸り、全身の筋骨が牙王の腐肉に食られるようだ。

「あああつ……あああん……あああ——ッッッ!!!」

女の中心を穿たれる強烈な快美。肉と粘膜、そして体液とがぐちゃぐちゃに攪拌され、



肉悦の渦が粘膜を切り抜く。身体の内まで容赦なく解剖され、紫苑の瞳は裏返り、白目を剥き出しにしてしまう。端正な美貌が、獣の情動の前に力なく塗りつぶされていく。

「そらそらそら、そらああああ——ッ!!」

抽送は勢いを増して、激しい杭打ちに脳底に幾重も赤い火花が散った。全身の筋骨が悲鳴を上げるかのように、膝当や肩当てが擦れ合った金切り声を漏らす。相手が民の仇である妖魔だと分かっているにもかかわらず、肉弾戦のなかにあつては牡と牝の関係に縛られてしまうのだ。ズブッ、ズブブッ、ジュブ、ズウウウウウウ!

「やめるッ……壊れる……やめッ……こ、壊れちゃうううう!!」

愛汁がしぶき、削られた艶膜が捲れかえって、生々しい赤身を曝す。強烈な吸引に魂まで吸いだされんばかりの落下感を覚え、突き上げられれば意識は天上高く打ち上げられた。

「イボが……ああ、削るな……くうあああああ……」

子宮口を貫き、産道を逆行し、まるで赤ん坊を産み落とすような今まで感じたことのない排出感が胎内で逆巻く。

「オラオラ、どうだどうだ、たまんねえだろうがッ」

ズブッ、ヌチュッ、ズブブッ、ズボツウウ、ズップ、ジュツチュ、ヌツチュウウウ!
捲れる愛唇に髪から飛び散るあられもない牝汁。汗か愛液か知らず、全身はずぶ濡れだ。
「くううつつふうううう……!?!」

胎内を吹き荒れる男根の抽送に、女の意味は慣らされていく。ムワツと濃厚な牝臭を溢

れさせて、そこにあるのは一国一城の主であることなど関係なくただ一匹の牝だけだ。

「出すぞ、グハハハハハ、たつぷりと味わえッ!!」

「やめろお、あああ、膨らますなッ、け、穢らわしい……くう、かつ……や、やめろ、だ、出すなああああッ!」

紫苑の悲痛な叫びは、間歇泉のように噴き上がる獣精の渦へ瞬く間に吞まれてしまう。

ズビュルルルルル、ビリュルルルルル、ビリュビツクウ、ビツク——ビリュビリュ、プウシヤアアアアアア——ッ。

「はああああああああああああ……ッ」

粘膜を焼き焦がす劣情の放出に、脳裏が白く灼けた。

「ダメだめああああ……とぶとぶ、あああ、とんじやうううッ!!!」

深くまで押し出される灼熱。少女は瞳を潤ませ、愉悦の波動に吞まれた。

鎖の軋む音と艶めかしい嬌声とが渾然一体となり、地獄の釜の沸騰音となって轟き渡る。

「ああ……うう……つ……うん……」

緊縮していた筋肉がドロツと融解し、鋭かった顔つきに隙が生まれる。

「どうした、竜王の化身といえども女としての性には逆らえぬようじゃのう」

犀玉がフフフと妖しく笑む。

「はああ……ン、ふ、ふざける……なっ……私はまだ負けてなど、いないっ……うふム」

紫苑は懸命に自我を保ち、声を張ろうとする。しかし意識は爛れた淫夢を彷徨い、茫と

していて判然としない。子宮空間をデロリとした汚辱液が満たしている触感はおぞましく、何時までも小さな痙攣がおさまらなかつた。

「あああッ……」

勃起を引き抜かれると、たっぷりの牡と牝の混合汁がゴヴァァッと濁声を上げて零れる。真っ赤に充血した腔洞から溢れ出る忌まわしい獣液に、肉丘がいやらしく悶えてしまう。

(妖夷如きに……このような辱めを受けるなんてエッ……)

牙王の恐るべき肉楔で子宮口をこじ開けられ、子宮へ直接射精されるといふ壮絶な体験を経た肉体は、女の悦びを味わいすぎて衰弱する。

剥き出しの乳房には巨大妖夷の手痕が痛々しいほどに残り、大量の汁に濡れた褐色の身体はいやらしくぬめ光っていた。

「苦しいか？　じゃがのう、それだけではまだ終わりではないぞよ」

股を一杯に開くという破廉恥な格好は身体への普段が大きい。無理矢理高められた極楽の余韻はまだ長く尾を引き続け、筋がヒクヒクッ……と引き攣る。

(まだこれ以上、辱めようというのかっ……)

妖夷に気をやらされてしまったことで、全身の血液がドクンドクンと激しく高鳴る。まるで興奮剤でも注入されたかのように、身体のかなで炎の塊がうねり狂うのが知れた。

竜王によって与えられた加護の反動が、胎内奥にまで注がれた精液の熱とゆっくりと混ざり、己の身のなかで息づき、根を張るのが嫌なほど体感できてしまう。

「ホホホホ……良人は種床を耕したに過ぎぬぞよ、竜王の化身。……お前の籠絡が妾達の仕事。死よりも狂おしいものを授けようぞ」

妖しく嗤う犀玉は指先に、米粒大の黄土色のものを摘んでいた。

「これは〈肉華の種〉というもの。お前の陰部をより卑猥に仕上げてくれるものじゃ」

紫苑は眼前に持ち上げられた種の正体を訝しんだ。今までの己の知識を動員しても、それに聞き覚えはなかった。

「耕した土には種を埋めなければ何の意味もないからのう」

「何を……んくうんうううう!!」

クチュッ、チュククッ……。愛液と獣液とが混ざり合った混迷を潜り込んでくる手先。だが今の今まで太い丸太のような勃起を受け止めていただけに、その細い指ではまるで物足りないと感じてしまう。

「……ンハッ、何をする気だ……。やめろ……ン……うやめろおうンああああ……!」

牙王の砲身を受け止め、拡張された粘膜層にとって女の手を呑み込むことなど容易く、みるみるうちに手首まで押し入ってしまふ。男性の生殖器のようにゴツゴツした凹凸はなく、滑らかで、どこまでも埋まってきそうな流入感が怒濤の如く押し寄せた。

「そ、そこ——ひいひいン……ッ!」

少女はゆっくりとながら元に戻ろうと収斂していた子宮口を犀玉の指先に撫でられ、黒髪をザックリと波うたせる。剥き出しの乳房がつきたての餅のように柔軟に撓んだ。

(だ、ダメだ……また、あんなすごいもの感じちゃったら……私の身体、本当に淫らに変わってしまう……ッ!!)

身体の弾けるような絶頂感覚を忌む心が激しく波うつ。必死に理性をまとめ、迫り来る悦楽に抗おうとする。しかし粘膜は火がついた蠟燭のようにみるみるうちに蕩けてしまう。清廉な心に迫る月宮の淫蕩の血脈が、毒のように回る。

「いやらしい孔じゃのう……妾の手を美味しそうにチュチュッと吸うておるぞッ」

「ふうううう……そ、そんなことない……私はそんないやらしい女じゃない……!」

紫苑は奥歯を噛みしめ、否定する。しかし犀玉の手が挿入されると同時に襲の動きが活性化したのは事実。まるで女武者の身体が、さっきの愛撫を忘れ難く思っているようだ。

「今妾の指はお前のいやらしく広がった子宮の口のなかを通っているのじゃぞ」

この辺りじゃ、と犀玉がなだらかな腹部をそっと撫でる。少女の細身がピクッと小さく跳ね、形のよい臍が柔らかく撓んだ。腹は普段外に出ないせいかわかぬ褐色の具合が弱い。

「ああ……ふ、ふか……いッ!」

繊細な部分への抉り。傷つけられてしまうという恐怖が脳裏を過ぎり、襲粘膜の締めりをよくしてしまう——その悪循環と共に、情炎は猛々しさを増すのだった。

「気持ちよいなら、そう言っても構わないのだぞ？」

口を噤んだ少女は、うんうんと呻きを漏らしながら首を振る——と。

突然腹の奥に小さなざわめきの波紋がはしり、キーンと金属的な刺激が肉を焦がす。

「そ、そこは……ンウウウ！」

コリコリッと子宮をまさぐられる汚辱感に、紫苑は唇を噛む。女としての性感帯を舐められ、悦びの漣が意識を揺るがす。

「フッフ〈肉華の種〉によって変容すれば、お前の子宮は最早、人の子を身籠もることは叶わぬ……淫らな牝犬として墮ちるばかりぞっ」

「いや、触るな……ひい……それ以上したら、許さない、ぜったい許さないからなッ！」
女の器官として、赤ん坊の揺りかごといふべき場所を妖夷のような猛毒の存在に嬲られ、少女は色を失う。いくら紫苑が女を捨てたとはいえ、女性として生まれた以上母性という存在はそう簡単には捨てきれない。その母性を黒々とした手で脅かされるのだ。どれだけ強気に対応しても、ゾクゾクと胸震いはおさめることができなかつた。

（私は女を捨てた……捨てたのだッ）

女としては当然持つ本能が、紫苑へ囁くのだ。いつかもし好きな人が現れたのなら、その人の子を孕み、そして産み、育てたいと――。

子宮はまさに命の根幹とも言うべき存在。それを脅かされる原始的な恐怖は、どれだけ精神と肉体を鍛えようとも、決して拭いきれない。

「怯えずともよい……ただお前の子宮へ〈肉華の種〉を定着させるだけじゃからのうッ」

子宮をグッと拉げられる圧迫感が襲う。そのまま身体を一直線に切り裂かれ、喉から手が突き出すのではないかという被虐感に少女は涎を零す。

「ンンンンヌウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……!!」

脊髓を通つて脳幹へはしる痺れに、少女の顔が歪んだ。

身体の中にある拭いきれぬ女の成分をかき混ぜられ、濾過されて結晶化される。女が疼き、女であることを否定してきた精神と女を捨てきれない肉体とが融合させられていく。

「〈肉華の種〉の効力は………身をもつて知るがよいぞ」

ズボボッ。一遍に犀玉の腕が引き抜かれ、瞬間少女の眉間に赤い閃光が突き刺さる。

粘膜が子宮から陰口まで一貫きにされ、指先の蠢動や腕のすべやかさが髪にべつとりと残つて、抜かれた後も長く果肉が快感に顫えた。

「~~~~~」

見開かれた瞳がくすみ、女武者は小さな快美を覚えてしまう。粘膜全体がざわめき立つて、愛液がズブドップといやらしい卑音を漏らしながら噴き出した。

「んくッ。ンッ……ハアッ……ハッ……ハッ……アア……」

褐色の武者は全身のあらゆる部位を使つて呼吸するように激しい息継ぎを繰り返す。手を引き抜かれた瞬間の衝撃は凄まじく、声を上げて悶絶しなかつたのが奇跡と思えるほど。

「ホホホ……さすがは、麗しき姫君じゃ……。愛液の方もやはり極上」

妖姫は愛液にずぶ濡れになった手先へと丹念に舌を這わせる。指と指の間に愛液がネットと糸を引いて、白濁がポトポトと滴った。

「犀玉ッ、私はどのような辱めを受けたとしても屈しない……お前達の企みに溺れるよう

な弱さは私にはない!!」

強靱な意志を剥き出し、目の前の女を睨めつけてやる。

しかしその実、心のなかは今まで味わったことがないほどに動揺し、震撼していた。

子宮に埋め込まれてしまった〈肉華の種〉――。

一体それに何の効用があるというのか。得体の知れないものが身体のなかにあるだけでどうにかかってしまいそうだ。

「その強気どこまで続くかのう。〈肉華の種〉に耐えきってから言うのじゃな……ヤレ」

犀玉が傍に傳く小鬼へ命令すれば、仰向け水平にさせられていた体勢に変化が生じる。

足首に取りつけられた鎖付きの拘束具が、鎖の軋む音と一緒に吊り上げられ、水平だった脚が上方へ、頭の方は下方に傾ぐ体位――天井に両脚を大きく向ける格好にされた。そのあまりに急激な移動に肩当てが大袈裟な音を立て、膝当が小刻みに揺れる。

「ああ……うう……!」

注ぎ込まれた牙王の精力塊が瀑布の如く腹部へと雪崩れ込み、内臓を圧迫する。さらに両脚が左右へ強制開帳させられ、薄い羞毛に縁取られた陰唇がパツクリと虚ろな蜜壺を覗かせ、天井に向けて生々しい内臓を曝す破廉恥な格好になる。

「ああ、何……ひ、開くな……ああ、ひ、開くなあつ!」

妖夷達にムツクリとした陰肉と会陰部を覗かれて、恥辱の炎が身を灼いた。

（見られてしまっている……こ、こんな鬼共に、私の……み、見られてる……!）

小鬼達からの視線が身体に黒い染みを造り上げ、そこから肉体が腐りそうだ。

「さあ、お前達、あとはたっぷり遊んでやるがよいぞ」

犀玉の言葉に、闇のなかグニャグニャと蠢き——幾匹もの小鬼達が現れる。

落ち武者のように振り乱した髪に、額の辺りに小さな角。全体的に赤黒く、手足はひどくちんまりとして骨と皮だけなのに、腹部がでっぷりと膨らんでいるという奇形。まるで腐った肉片が意思を持って這いずっているようだ。

しかし驚いたのは小鬼の出現だけではなく、彼らの股間に生えた、その肉体と比べるとあり得ないほどの大きさの肉茎だ。

（こんな奴らに犯されるのかっ、私は……）

絶倫な精力の塊を見せられるだけで、紫苑の頭のなかに牙王の規格外で破壊的な肉根が浮き上がってくるようだ。忌まわしい体感が再生されるようで柔襲のジンジンと嫌な疼きが地響きのように身体を揺さぶる。

「月宮の姫へたっぷりと精液を注いでやるのじゃっ。〈肉華の種〉の成長を促進せよっ」

グゲへへへへ！ 小鬼達は心がかき混ぜられるような金属的な哄笑を上げると、奇形の身体を蠢かして己の肉棒を擦り始めた。

「種が完全に芽吹くまで時間がかかるからう。たっぷりと精液を味わうがよいぞ」

ゴシゴシッと小鬼達は、紫苑のすべやかな肉体を見ながら自慰に励む。肉茎を擦れば擦るほど浮き上がった血管がピクピクと激しく蠢く。鬼達の昂奮材料にされていることがた

まらなく、血が滲むほどに唇を噛みしめた。

(ああ、き、気持ち悪い……あんなにびくびく……っ)

紫苑は、頭の方へ血が下る今にも意識が焦げつきそうな苦悶に喘いで目を瞬かせる。

「うへへへへ、出さず、ゲゲゲゲ……くらえッ」

ビュビュビュッ……！ 放たれた精液は命中させるべき肉孔ではなく、それを飛び越えて剥き出しの乳房の上に張りついてしまう。泥のような粘着質と、ずっしりとした重さに乳頭が潰され、紫苑は眉をキュッと顰めた。胃酸のような気色悪さが柔肌を包む。

「あひやああああ……ッ」

紫苑は放たれたばかりの獣精の熱さに、思わず悲鳴を上げてしまう。身体中の敏感な神経を焼け火箸でまさぐられ、突き回されているような恐慌感が怒濤の如く狂う。

「うへへへ、失敗失敗」

小鬼はまだまだ頑なまでに勃起した逸物を擦りながら言う。

(クソクソクソッ……こんな奴らに弄ばれるなんて……くやしい……ッ)

小鬼達の妖しく輝く双眸は紫苑の全てを覗き見、己の性欲を昂ぶらせる道具として見られてしまう。紫苑はそれに対して何もできないことが悔しくてたまらなかつた。

「うう、や、やめろ……もうこれ以上、私を汚すなアッ……」

他の小鬼達もニヤニヤと嗤いながら逸物を擦り、再び別の方向から白濁液が噴射された。

「ひゃあ……ンウ！」

ぱっくり広げられた腔に精液がべっちよりと張りつけば、愛液と絡み合った小鬼の牡汁は発酵するような甘臭さを醸し、粘膜の重たさに襲がヒリヒリと疼く。

小鬼達は紫苑が喘げば喘ぐほどに卑猥な視線を強めてくる。忌まわしさと魂の震えるような屈辱感で総毛立つ。

「ああ、妖夷のごときが見るなっ……私をこれ以上、見るんじゃない……！」

白い生臭い体液が赤い粘膜のなかを下り、子宮に熱い渦潮が巻く。まるで蛞蝓なめくじが襲を這いずるような汚辱感に横隔膜が引き攣った。

「うへえ、やったぜッ」

小鬼達はゲラゲラと腔にぶっかけられたことを悦ぶ。絶えず身体に刺さる小鬼からの視線のせいで身体は必要以上に強張り、体力ばかりか、精神力までもが削り取られていく。

「うえええ……な、何……あああ、お腹うう……張るう……!!」

突然腹にはしったのは、強烈な電圧だ。同時に、ジュルルルルッと身体の奥底で強烈な吸着感が生じる。そしてその源は、種を埋めたという子宮。

身体全体が地獄の虚ろへ呑み込まれんばかりの強烈な転落感。少女は目を剥いた。

「ひいああッ!? あ、ああッ……吸つてるう……吸ううう……ひつつっキイイイ!!」

まるで身体の深部に大きな口が造り上げられ、それが精液に反応して思いっきり吸い込んでいるような快感の嵐が胎内で吹き荒れる。その衝撃の大きさは牙王の逸物が子宮内に食い込んだ時の比ではなく、身体が別次元に飲み込まれるようなおぞましさがあった。

「種が好物な精液を吸って成長しているのじゃ。安心するがよいぞ、すぐにそれさえも快樂へと繋がっていく」

やがて腹の強い張りはなくなる。精液を吸い終わったということか、と恐ろしい異物の植えつけに今更ながらに身体の芯が冷える。

だが小鬼達の下卑た声はおさまることを知らない。

「うへえ、出るぜえええええっ!!」

ビリュビリュルルルル、ドックドップウウン!

「あああ、いやああああ、熱い、あついいいい……ッ!!!」

命中したのは秘芽——まるでそこを爪弾かれるような振動に、少女の太腿はプルプルと波を打って痺れた。爪先がキュッと内側へと曲がる。溢れた汗が太腿を色っぽく濡らし、まだ十代の身を匂い立たせて艶めかす。

「もう我慢できねええッ!」

「まだまだ終わりじゃねえ、ぶっかけてやるぜッ」

控えていた小鬼達はいきり勃った肉棒を押しえながら、紫苑を囲んで扱き始めた。

息もできぬほどのムツと空気を濁らす膣えた悪臭。紫苑は口をパクパクと喘がせる。

(ああ、いやだ……こいつらの精液をこれ以上浴びるなんて、い、いやだあッ!)

このまま自分はどうなってしまうのか、身体中にぶちまけられる精液がまるで死に化粧のように少女の恐怖を肥大化させる。

「ンッ！ ……ンウウウッ…！」

必死に四肢の拘束から逃げだそうとするが、ガッチリと嵌まったそれはまるで蜘蛛の糸の如く、女体に絡みついて離れない。肩当てが激しく揺れて少女の肉体を擦り、固く膝甲に守られた足先が弱々しく内股になってしまう。

「うう、出るッ！ グヘアアッ!!」

「お姫様のツラに出してやるぜ、ウケケケケッ」

小鬼達は一齐に己の腰をグンッ！ と勢いよく迫り出させる。その瞬間、無数に紫苑を包围する亀頭が炸裂寸前の鳳仙花のように膨張すれば。

ビュルルルルウッ、ビュッ——ビュッ、ビュ、ビュビュルルルル——！
「あつひやああああ…熱い、くつつはあああッ！」

胎内で炸裂する白濁汁の灼熱感に少女は頤ほおを反り返らせ嬌声を上げる。

ブリウウウウウウウウ…ドクタン、ドクドクドクドクドクドク…ッ!!

少女の四肢に降りかかる精液は肩当てや小袖にも滲み、肌理きりの細かい肌をどす黒い欲望で染め上げ、退廃した美しさを描き出す。

「ああああ、震える…あそこが、あああ、震える、びりびりする…あああ、ダメだあ…熱い…あああ、いや…お、おかしくなるうううう…！」

〈肉華の種〉も生殖液の熱に感化されたかのように激しく蠢き、子宮から膣肉を激しく灼き尽くす。竜王の化身と恐れられた少女は胎内から込み上げる身も心も呑み込まれるよう



な快感に柔粘膜を痙攣させて、四肢をピーンッと緊張させた。

「やめろ、かけるなあああ……かけるな……むぐうううンンンッ!!?」

放たれた精液が口腔に入り、鼻へ付着し、少女をさらなる地獄へと引きずり込む。

ただでさえ頭に血が上り、身体のなかを炎が暴れ回るかのように狂おしいのだ。それがさらに鼻や口を塞がれることで、呼吸困難という死の恐怖が忍び寄る。だが破滅的な快感に彩られた精神は、死の淵を覗く恐怖さえも悦びへ変えていくのだ。

緊張した肉体は弛緩するべき瞬間を見逃したかのように攣り続けている。

（私は……こんなところで、負ける……負ける訳には、い、い、い、かないのにッ……ああ、ダメッ、苦しいのに……よ、よくなっちゃう……き、気持ちよく——）

凌辱の五月雨は降り止まない。女の身体を絶望の淵へ追い落としもまだ足りないかのように降り注ぎ続けるのだ。

「むくる、くるじい……も、もうやめ……ムグググンッ……!」

身体のかなに残る牙王の精液と新たな小鬼の精液が相乗効果になって、女の身心を強く昂ぶらせ、清廉な心を灼く。さらにこの乱れた姿を妖夷達に見られているという被虐感がさらに官能を煽った。

（狂わされちゃだめだ、紫苑。耐えなければ。……今ここでまた気をやっちゃったら、これ以上は——み、淫らな血を抑えられない……!）

少女の強い信念に満ちた心とは裏腹に、肉体は外界から及ぼされる影響に曝され続ける。

翁は呑気に嗤いながら、様々な道具の中から毒々しい緋色の縄を取り出す。

「さて、少し苦しいと思うがお嬢ちゃんにはこれで色っぽくなってもらおうかのう」

「ほう、縄化粧というやつか」

犀玉は感心したように頷く。

骨と皮の老人は妖しげに微笑みながら、紫苑の身体へ縄目を打っていく。

「くう……うう……っん」

それは老人とは思えない力強さだった。骨と皮のどこにそこまでの力があるのかと訝しいほどに力強い縄の植えつけに月宮の姫は表情を歪めた。

（うう、罪人のように、このような辱めを受けることになるなんて……っ）

はじめて受けるまるで捕虜になったような恥辱感に、呼気が掠れる。

（でも、耐えなければ……国のため……皆のため、に……っ）

身体の線の浮き出た長襦袢ごし、乳房を搾りだすように縄を打たれていく。両腕も後ろ

手がちりと結ばれ、虜囚も同然の縄化粧に、紫苑のなかの武士の心が軋んだ。

少女の美しさも相俟って、縄の絡まった姿は蜘蛛の巣に囚われた蝶を思わせる。

「ンッ……んくふ」

縄目で引き絞られ、今にも蕩け崩れてしまいそうな乳房がいやらしく弾んだ。

先ほどの口唇奉仕の快美の灯火が肉体のなかで燻っている今、疼く乳首は襦袢を押し上げて、馥郁たる色気を発散する。

「うっひっひ、いやらしいのう、やらしい身体じゃあのう……」

「ああ、や、やめ……うう……ん！」

搾りだされた乳房を老人の手がすっぽりと包み込む。

老人の手は意外に大きく、その指先は日々医術をなしているだけに器用に蠢動して甘い痺れを送り込んでくる。乳脂肪を丹念に揉み込み、かと思えば、頂きの尖りを指腹でコリコリと摘む。

「ああ……うう……くうう……や、やめ……だ、だめえ……だ、うううん……ッ」

予想以上の肉悦を前に少女はまるで処女のように身悶えてしまう。

縄目を打たれ、身動きが取れない状況なのに、悔しいはずなのに、悦びはいつも以上の鋭さで食い込んでくる。被虐の花火が幾つも身体で爆発するようだ。

「……よしよし。なかなかの感度じゃ、これなら僕の実験にも十分耐えられるじゃろうて」
紫苑の肉体はゆっくりと床を離れていく。一体何が起きたのだと慌てて首を後ろへ向ければ、梁の上に通された紐を老人が勢いよく引き上げているではないか。

竜姫は滑車の原理でどんどんと吊り上げられる。

（ああ、縄が……アア……く、食い込む……ッ）

無駄な脂肪はないものの、全身が縛められる窮屈さがたまらない。

そればかりかささぎの愛撫を受けて屹立の具合が高まった乳首も、乳房全体を搾りだされることによって充血の艶めかしさを強める。

精液をかけられギトギトになった黒髪が背中に張りついていた。

「ほほう、さすがは儂じゃ。素晴らしい繩化粧じゃ……いや、今日はほんに絶好調じゃ」
少女は目の前が真つ暗になる思いだった。一国の主として、このような恥辱を甘んじて受ける覚悟はあるものの、まさかここまでされるとは予想だにしなかったのだ。

もしこの瞬間、この老人が自分の正体に気づいたらどうすればいいのか。

月宮の当主が繩を打たれ、いやらしい装いで花街で身悶えているぞ——集まる家臣や民の顔が幻になって現れては消え、消えてはまた現れる。民はこんな自分を見てどう思うのだろうか、何と罵倒するのか。

それを考えると自分を蔑視する視線が、口汚く罵る声が、五感を深々と貫くような思いに意識が茫漠として魔うまされてしまいそうだ。

「ああ……う、うう……っ」

（何をよ、弱気になっている紫苑……だめだ、気をしっかり持たなければ。……こんな気弱では妖夷の思う壺だぞ……）

必死に自分へ言い聞かせる。しかしいつものように心は奮い立ってはくれない。

先の口唇奉仕で愉悦に全身が痺れていた。己の精神の変容に、自我の軋む音が静かに骨身にまで響いてくるのが分かる。

「おや、こりゃなんじゃっ？」

「ひいっ……っ……！」

少女はギグンッと全身を陸へ打ちあげられた魚のように跳ねさせた。突然、鯨牛が陰部を貫く張り型を爪弾いてきたのだ。

「ああ、それは外さないでくれよ。それがないとこいつは、ダメなんだ。……構わないだろ、あんたのやることには何の支障もないはずだ」

「……うひっひっひ、こいつは稀に見る変態じゃのう……まあ、よいわ。確かに僕のやることには何の影響もでんからのう」

犀玉の言葉に、老人は胸くその悪くなるような声を漏らす。

「ああ……何を……っっ！」

女武将は突然お尻に冷たい外気の侵入を覚えた。ゾクゾクッと内臓まで冷えるような悪寒が広がり、氷柱を差し込まれるような痺れが繊細な粘膜を貫く。

(お、お尻……み、見られてる……)

ペチンッ。臀部を強かに叩かれる。

ううッ……。かすかに声が零れる。老人の肌の感触は独特でまるで干からびた布を押しつけられているようだ。そして尻肌へかすかにかかる老人の吐息はひどく熱い。

(いや、そんなお尻、見るな……さ、触るなあ……!!)

羞恥が業火のように身を灼く。褐色の首筋は桃色に染まって、いやらしく香る。

「こいつはあよいケツじゃのうッ、素晴らしい、全く素晴らしい娘じゃぞ、お前は」

少女の臀部は剥き卵のようにツルリとして、日々の鍛錬の成果としてツンと上向きにな

り、えくぼができていた。

少女は悩ましく息をつきながら、眉を蹙めた。こんな変態な懲罰が早く終わって欲しいと願わずにはいられない。

「さあ、ゆくぞおっ……」

鯨牛の指先がきつく窄んだ肉雷へ触れてくる。

「ああ、ああ……何を……う、うん……！」

腹部への想像以上の圧迫感に紫苑は呻いた。込み上げてくる汚辱感に唇が顫える。

「や、やめてえ……そんな、き、きたないっ」

少女のしなやかな身体がピクピクッと顫えて撓る。身体を吊り上げた緋色の紐がギギッと猛々しく唸る。せっぱ詰まって、呼吸がどんだん激しく、激情が内臓粘膜のなかで悶える獣の如く咆吼を繰る。

「これはよい臀孔じゃぞ……ふふ、菊の皺具合も素晴らしい。感度も良好じゃあ……」

不浄の孔へ刻まれた生々しい皺を指腹で撫でつけながら、ニヤつく鯨牛。

「ひひひひ、ケツ孔をいじられるのははじめてかっ？」

「だ、だめ……そんな……き、きたない……う、うむ……！」

ぐいっ、グイグイッと肛門を指で押されるだけで、とてつもない圧迫感がお腹全体に広がって喉が吊り上がる。

（ああ、気持ち悪い……ああッ、お尻を、い、弄られるなんて……えっ！）

排泄される場所へ食い込む逆流感が汚辱感を呼び慄然とした。

「なかなか強情なケツじゃ……ひひひひひ、ならこれはどうじゃっ？」

老人はいきなり片方の手で張り型を刺激してくる。脂汗と愛液がしぶいて、畳を汚す。

「あひひひひひ——ッ」

その瞬間、紫苑の陰部から脳天へかけて電撃が迸った。脳底がグラグラと揺れ、全身の筋肉が甘く振れる。全身の力がドッと抜けて、硬く閉じていた菊孔が綻びを見せた。

「さあ、新しい世界を見せてやるぞ」

秘匿すべき排泄粘膜が弛んだ瞬間。肛肉へ老爺の指先が突っ込まれる。紫苑は突然の異物侵入に豹の如き凜々しく締まった身体を仰け反らせた。

ズブズッ……ズブズッ……ズウウウウ……！！

「やめッ……そんな汚いところ、だ、だめえ……」

排泄孔を弄ばれ、少女のなかに恐怖が渦巻く。全身が緊張し、縄が食い込みを強めた。

「ダメなものか。ほら分かるじゃろ、僕の指がお前さんのケツにめり込んでおるぞい」

尻を弄るなどという神をも恐れぬおぞましい背徳行為を行えば、自分は無間地獄に墮ちてしまう。だが今の状況では翼をもがれた鳥同然に抵抗らしいことは何もすることができず、おぞましい行為に身を任せ、少女は悔しさに奥歯を噛みしめた。

「い、痛い……ひッ、い、いつう……」

指は実際それほどの太さも長さもないはずなのに、体感はいまるで丸太のように太く、槍

のように長い。今にも胃袋を抉り、お尻が引き裂かれるのではないかという恐慌を覚えずにはいられない。

「おお、ギチギチしまつてよいケツじゃあ。あっひっひっひ……っ」

日頃の鍛錬で腹筋がよく鍛えられているせいか、括約筋は敏感だった。さらに若い粘膜は貪欲で、侵入物に対して鋭く反応して吸いついてしまう。

「お尻、や、やめて……うむ……うん……！」

（お、お腹……うう、さ、裂けちゃう）

指の動き具合や、穿りの程度が締めつける粘膜ごしにイヤというほど知れてしまう。

さらにこの恥姿を、妖夷に見られ続ける羞恥で精神が火だるまにされるほどに辛い。

「うう、く、苦しい……ぬ、抜いて……ああ、だめ、奥、だ、だめええ……ッ」

少女は汚辱にまみれた初体験に息も絶え絶えに身を搾る。吊られた身体がギチギチと軋み、脂汗が全身をヌラヌラと輝かせ、囁んだ唇がプルプルと痙攣を繰り返した。

それでも尚、ズリズリと粘膜を巻き込みながら指先が深々と突き刺さるのを止める術はない。菊皺が呼吸するようにひくつき、内側にめり込む。後ろ手に腕を結ばされ、吊り上げられる不自由な格好のまま粘膜が無理矢理刮り貫かれ、未踏の感触に背筋が栗立った。

「ああ……はあっ……っはあ……うう……く、くるしい……ううん」

指の侵入を防ごうと腹筋に力を入れると、女体を締め上げる紐の食い込みが深まり、乳房がさらに搾りだされてしまう。

そのせいで全身に入っていた力が抜けて括約筋が弛み、排泄孔抉りをより柔らかく受け止めることになってしまふ。

ゾクッ。頭のなかに異物を挿れられ、それで頭蓋を疼かせられるような奇妙な感覚が脳裏を過ぎった。襦袢ごしに透けた肉体が艶やかにぬめ光る。

(今……今の感じは……何だッ!?)

込み上げる不快感の一方で、少女の神経はかすかに焦げつくのを実感する。だがその心胆の冷え込む違和感の正体を探す前に——直腸挿入された指が勢いよく引き抜かれた。

ズヌッ、ヌウウプウウウッ!

「ああひいひい……!?!」

少女は突然の排泄感に白目を剥きそうになる。身体中の血液が一瞬にして引いていくような強烈な吸引に、毛穴がブワッと開く。

それはまるで本物の排泄のようで、指一本開いた孔は粘膜を捲られたまま潤む。

(お尻、熱い……私は、私の身体はうう、どうしてしまったんだ……つ)

ズッポリと指によって刳り貫かれた粘膜が元に戻ろうといやらしく痙攣し、水蜜桃のような臀部がプルンプルンと小刻みに揺れた。

「どうじゃ、ケツは？ 女のなかにはおま○こよりもこっちの方がいいと、病みつきになる者もおるぐらいだからのう」

鯨牛は再び指を突っ込み、指の先っぱをクイッと曲げてくる。粘膜を火で舐められるよ

うな脳裏が疼く刺激に、ヒィヒィという声が喉を突き上げてしまう。

「ふふふ、ここも蕩けおつて、好き者めがっ」

「そこ、らめえ……アッヒィヒィヒィ!!」

紫苑は煩悶の声を上げた。張り型を突然握られ、動かされたのだ。ただでさえ肛肉を抉られ神経が鋭くなっているなかでの刺激は凄まじい情欲の炎を生み出してしまふ。

「小陰唇にあわせて、臀の方もままそうに締めつけるのう。うっひっひっひっ」

ズッポン……。指が引き抜かれる。

「はああん！」

思わず漏れてしまうのは安堵と、筋肉が弛緩していく不抜けた声。まるで今の声がこの国中いっぱいにもまで反響するほど大きなものに思われた。

（私は……お尻を嬲られてなんて声を出してしまうんだ……ッ、くそお……!）

腸粘膜への圧迫感が消え去ると、ズキズキと何もなくなった直腸内が熱く疼いてしまう。その空虚さに忍び込んだ妖しい感覚が尚更粘膜を炙った。

だが今の感覚に馴れる訳にはいかなかった。それは媚肉が覚えた身も心も蕩ける発作のような激感と通じるものがある官能の成熟の気配だったからだ。

（私はお尻で感じるようないやらしい人間ではない……私は……家臣を、民を守るために、ここにいるのだから……）

菊皺は指による拡張ですぐには元に戻らず、まだ親指大に入り口付近は開いたまま。

「おお臭い臭い……さすがの美貌のあんたも、ここまでは綺麗にしきれぬらしいのおう……ヒョーヒョヒョヒョヒョ」

鯨牛は腸を穿った指先をすんすんとこれみよがしに嗅いでみせる。

「ああああ……や、やめろ……ッ……！」

身体のなかで最も穢らわしいところを弄られた指を嗅がれる、毛穴から火が噴き出さんばかりの羞恥に、腸が煮えくりかえりそうなほどに声を張り上げた。

「極上のほぐれ具合じゃったぞ、ヌシの肛門は。これならすぐに慣れるじゃろうて。フフ、そうなればたっぷりと腸液が零れて、より美味なケツ孔になるじゃろう」

「も、もう……身体、こ、壊れるう……ウウ……ッ」

「安心せよ、人体はそれほど柔ではないっ、ひっひっひっひっ」

鯨牛は隅に無造作に置かれていたもののなかから、子ども達がよく遊ぶ竹で造られた水鉄砲のようなものを取り出す。ただそのの、水鉄砲でいうところの水が出る箇所には、鳥の嘴のような細い突起が突き出していた。

老師はその水鉄砲を、用意されていた桶のなかへそつと漬け込む。そしてお尻のところについている取っ手をゆっくりと引っ張った。

吸引音がしつとりと畳敷きの部屋に響く。

「お若いの。お浣腸はしたことはあるかな？」

言葉の意味だけを知っている紫苑はゾクリとして身をくねらせた。

「なんじゃ、お浣腸ははじめてか。女はなかなか糞を放り出せないのが多くてのう。そういう時には、乱暴ではあるが液体をぶつこんで、嘔き出させてやるんじゃよ、ひゃつひゃ」
老人はいやらしく嗤い、水鉄砲の取っ手を緩く押ししてみせる。すると先端から、ピュッとトロミをもった液体が嘔き出し、畳に染みを作った。

男の明け透けな言い方に、少女はその美貌を悩ましげに赤く染め上げる。

（あ、あれを……私のお尻のなかに……!?!）

老人の視線が、自分の半開きになっている卑猥な臀蓄へ向けられていることに気づくと、身に迫る汚辱感に一際激しい胴震いが駆け上がった。

（あんなものを挿れられたら、お尻……き、傷ついてしまう）

デリケートな部位へ近づく嘴角。それはまるで刃物のような鋭さを持ち、刃物のような嗜虐性を内包していた。

紫苑はこれ以上の辱めを拒否する。しかし老人はそんなことはお構いなした。

「安心するがよいわい、指を美味しそうに呑んだほどの菊孔じゃ。これぐらいのモン、容易く味わってしまうじゃろうてつ、うっひよっひよっひよ」

ズブッ……！ 氷をあてがわれるような骨身に染み込むヒリッとした感覚が、直腸へ亀裂を入れる。粘膜全体が喘ぎ、太腿は筋が深く浮かび上がるほどに強張ってしまう。

「あああはあ……はいるッ！」

嘴角の挿入に、少女は顔を顰めた。しかし小指大のそれはさつきまで散々、腸粘膜を穿

くっついていた人差し指よりも細いから、すんなり括約筋を通過してしまうのだ。

「ンウウウ……くうはあああ……んぬううー！」

竹製浣腸器はまるで砕いた氷のように冷え冷えとしていて、背筋を粟立たせる。粘膜の層のなかへ突きつけられる硬質の具合に、呼吸が震えてしまう。

「最初はゆっくり注入してやるぞッ」

取っ手がゆっくりと押し込まれ、直腸の温かさと浣腸器の冷たさがジンワリと溶け合う。薄い障子を通して聞こえてくる夜の歓声が、まるで月宮の姫の媚態に沸く民の声にも思えて、童姫の自我をギリギリッと軋ませてやまない。

ヒャアア……ッ!! 液物の第一声が粘膜内に跳ねた瞬間。まだ硬さの残る腸内へ、浣腸器の肝の冷えるような戦慄が流れ、身体をくの字に捻ってしまう。

「うつつ……ひい、……きいいい……ああ、出てる……う、くう……!？」

(いやだ、私のお腹のなか、ああ、変なので……ああ、み、満たされちゃう!!)

腸腔温度がゆっくり低下し、まるで全身の血がどこかへ消えていくように身体の芯が凍りつき、同時にそれとは全く正反対の淫熱がカッカッと陰部をくるむ。

(私のなか、いっぱいになってる……ああ、お尻、お、おかしくされるッ)

血液が逆流を始め、体液が内に向かって分泌される——それはまるでこの世のありとあらゆる不条理を身をもって体験するようだ。

脂汗にまみれた肌にくっついた襦袢が気持ち悪い。少女の美貌は被虐感情に爛れ始め、

目はカッと見開かれる。食い縛った口元は顫え、身体のなかを急速に蝕んでいく恐ろしき内臓実験に為す術なく、されるがままになっていく。

「どうした？　えらく無口になってしまったようじゃが？」

まだ浣腸器を差し込んだまま、老人が肌を愛撫してくる。

「や、やめ……やめて……ああ、お、おかしくるう……こ、これ以上は……はあはあ、はああ……つ」

少女は悔しさに奥歯を噛みしめた。〈竜王の加護〉が備わっているいつもなら、自力で縄を引きちぎり、普通の人間に後れなど取らない。しかし妖夷の力を受けた今の身では赤子同然の筋力しかなく、変態老人に好き放題されるのに甘んじるしかない。

これは武家として生まれ、国主としての帝王学を学んだ少女の人生を踏み躪り、嘲笑われるが如き狂おしいことだった。

「もう少して全部お浣腸し終わるぞ、ふひよひよひよッ」

チュパアッ……。さらに腸粘膜へ溶液が噴き出され、ジリジリと粘膜の疼きが強くなる。お腹への負担が重々しくのしかかり、腸管がのたうち、ひどい負担となって紫苑に苦行を強いた。

「さあ、これで終わりじゃ……」

溶液が全て浣腸され、下腹がぷっくりと膨れた。その浣腸液に押され、張り型が数寸、ズズズと粘膜を引きずりながら下がってしまう。

「さあ、抜くぞ。しっかりと肛門締めんとすぐに漏れちまうからのう、気をつけろ」

浣腸器の管は細く頼りないはずなのに、今少女にとっては理性の命綱も同然。

「ぬ、抜いちや……だ、だめええ……もれえ……漏れるうう……」

今排泄感を味わえば、全身の緊張が崩壊してしまう。紫苑は恥も外聞もなく喚いた。犀玉は嗤い、人間の深遠な欲望の生み出す行為の、残忍さの効果に唸る。

今まで快美を覚えながらも耐えてきた竜の姫。今の喚きは、そんな逞しき清廉な姫が漏らしたはじめての苦境の声だったのだ。

「さあ、全部入ったぞ？ どうじゃ、娘。どうじゃあ……？」

まるで身体のどこかに熱泉が沸いたような灼熱感。汗や愛液、色々な体液が次々と蒸発していき、頭が真っ赤な闇に呑み込まれそうだ。

（耐えてお願い。こんなのに負けられない……国を守るために……わ、わたしは……つ）
負けられない、負けられないの……と心のなかで強く念じる。しかし排便欲求という残忍な生理活動が身体を心を蝕む。肉体と精神、どちらが先に壊れるか知れない。

「ほれほれ、我慢はよいぞ。何をしておるのじゃ」

老人は溶液注入によって火を噴くような流入感に煩悶する腹部へ、軽い按摩を施してくる。その普段なら何でもない行為も、今の状況では身体を串刺しにされるのと同等。

「ら、らめえ……はうううう……ら、らめて……らめてく、くひゃい……つ」

最早言葉を発するのも辛く、舌が回らない。それでもひっきりなしに少女は、非力な老

人相手に懇願してしまふ。ありとあらゆる振動が内臓を破壊せんと駆けめぐり、崩壊の危険の足音に幼子のように顫えずにはいられなかつたのだ。

さらに縄によつてぶら下がっているため、踏んばることができない。そのせいで余計に排泄感が差し迫り、間近なものに思われてならない。汗と愛液で艶めいた太腿はプルプルと怯え、脚指の先はさつきから落ち着きをなくして閉じたり開いたりして忙しない。

そして腸までその敏感さを増して、依然と突き刺さり続ける注射口が、まるで太い杭のように感じられてならなかつた。

(ここで耐えなきや……絶対、妖魔……ようい、なんかの手にお、おち……おちては……負けてはいけない)

グリュリユリユリユツ……グリュグリュツ。不穏な重奏が腹部から奏でられる。

「それじゃあ、抜くぞい。ここで耐えねば、恥ずかしいことになるからう。心せよッ」
老人は改造された水鉄砲をゆつくりと引き抜き始める。

ヌポツ、ぶつぶうう……。空気と液体とが混ざり、出物のような卑猥な音が零れた。
(こんな屈辱、竜王様の加護を受けた私が受けるなんて……アアア……！)

嘴管が引き抜かれる。腸腔の気圧が一気に下がり、それと同時に直腸を締め上げる灼熱の溶液が一気に、外界へ飛び出そうと烈火の如く疾走する。蟻走感が腸粘膜全体を侵犯し、同時に脳天から腹筋にかけて淫蕩な雷鳴が轟いた。

ヌツポオツ……いやらしい音を立てて嘴管が完全に抜かれれば、紫苑の菊孔はキュウと

脊髓反射で閉じた。

(お尻、熱い……ひいい……こんなのい、いつまでも……た、耐えられるか分からない)

まるで松明を肛肉へ挿入されるような灼熱感。いや、正確に言えば傷口に刺激物を入れられ、粘膜全体が激しい痙攣をしていると言った方がいいだろうか。狭い腸内で溶液が暴れるのは、まるで胎内を幾つもの手で掻き毟られているようだ。

「うひよひよ、さすがは若いだけあるのう。堪え性があつて最高じゃ」

菊花弁の窄まり具合を覗き込みながら、老人はわしゃしゃと下品に嗤う。

う……う、ん……つ。紫苑は今の均衡を保つだけで手いっぱいだった。というのに、ググッと乳房への縄目の締めまりがよくなつて、疼痛感が身体を雷光のように閃いては過ぎ、また閃き、女の神経を情炎が炙つて終わらない。

「安心しろ、漏らしてもいいようちゃんと受け皿は用意しておくわい」

吊り下がっている少女の足下に、底の深い皿が一枚置かれた。その皿の汚れ具合が、この老獺が今まで女性を痛めつけてきた歴史を偲ばせる。

(くそ……こんな人間が、我が国にいたなんて……ッ)

竜王の姫は、老獺な意思への怒りの炎がメラメラと高まるのを感じた。

さあ、たつぷりと吐き出すのじゃぞ？ 老人は少女の下腹へ圧力を加えてくる。

「ヒイヒイヒイ……!? うお、をおさないでえ……あああつくううう……も、もうダメ……だ、ダメになっちゃうッ……うううううう!!」



おさまらぬ薬液の流動。すっかり液物だけになった後もビチャビッチャと嫌な粘着音を立てて、畳の上に散って汚す。

「こ、こんなの、く、狂ってるッ……のにつ」

空虚になって楽になったお腹がズキズキと痺れ、全身が歓喜に沸くように灼けついた。

（どうしてだ……どうして……ああ、こんなに身体が疼くんだ……こんなはしたない行為なのに……一体、私の身体……どうなってしまってるんだっ……）

妖しい疼きがゾクゾクと身体を這い上がる。自らの排泄物の汚臭が漂ってくるたび、後悔と身体に起きた異変とが頭のなかでごちゃまぜになり、混乱に拍車をかけた。

（私、なんてことをしてしまったのだ……あ、ああああ……こ、こんなこと……つ）

咽ぶほどの悪臭が立ちのぼり、少女はガックリと頭を垂らした。

お尻はジーンジーンと甘美に振れ、閉じることのない菊孔は外気に粘膜が曝されて弱々しい痛痒感がひっきりなしに襲うのだ。

「最高じゃのう、ひゃひゃひゃ、お尻の孔がすっかりほぐれたわい。ほんのり赤く充血しておるのも風情があるわいっ」

「あぁっ……」

ヒクヒクとおもねるように微痙攣する肛門の縁を撫でられるだけで快美が爆ぜる。さっきまで硬い芯が埋まっていたかのようなそこは、真っ赤な花弁を曝してほっくりと綻んだ。「こりゃまるで本物の花弁じゃ。フフフ、汚穢を放る部位とはとても思えん。しりま〇こ

と言った方がじっくりくるわいっ……」

卑猥な華の咲き誇りの美しさに、鯨牛は見入ってしまった。

(くうう……なんてザマなんだ、私は……情けない……)

魂さえ灼き焦がす恥辱に唇を噛みしめる。

「これならすぐにも次の段階に進めるのう」

ほくほく顔の老人は再び竹製水鉄砲にさっきの溶液を仕込む。その姿を前に、少女は喉奥をキュッと窄めた。

「さあいくぞ、ひよひよひよ」

パチンツと柔らかに臀肌を張られ、姫武者はうううんと呻き、下肢を強張らせた。

男として育ち、自らも女を捨てたはずにもかかわらず、あまりの恥辱と屈辱に、女の性を脅かされることへの恐怖を抑えることができない。

紫苑は必死に臀孔を窄ませようとするが、今の大量吐瀉によって括約筋は麻痺してしまい、くつろげられた孔はなかなか閉じることができなかった。

「安心せい。今度の量は僅かじゃからのう。……物足りないぐらいかもしれないぞ」

まるで腸粘膜それ自体が求めるかのように、嘴角へと吸いついた。そしてゆっくり嘴管がめり込むにつれ、入り口から奥深くの内臓部へカアッと熱さが這い上がってくる。

チュツツツ……と張りつく音がはっきりと聞こえるほどだ。

そして注がれる溶液。それまで閉じるそぶりのなかつた臀蕾がキュウウウウと勢いよく

締まり、恍惚の波紋が腸粘膜で淡い広がりを見せた。

（私……か、感じている……お尻……き、気持ちいいって……そ、そんな馬鹿な……そんなこと、そんなこと……あ、ありえ、ない……あっちゃいけない……つ）

だが身体を蝕んでいるのは、否定してもしきれない甘露なざわめき。爪の甘皮を剥くように、襷で穢れを流し清めるように、汚辱感が溶けて消えていた。

それに合わせて膣を占める張り型から送られる粘膜への疼きが強まる。

「さてさて、それじゃあ、しっかりと頑張ってもらおうかのう」

男は洗腸溶液の入った桶より一回りほど大きなものを引っ張ってくる。忙しなく水が跳ねる音が聞こえてきた。

「フフフ、さあ、次はこれじゃよ」

「……ッ!!!」

菌を食い縛る紫苑は、突きつけられたものを見て心臓が爆発せんばかりに跳ねた。

男が手に握っているのは泥鱈どじょうだった。

黒くぬめぬめして、蛇のように撓っている。かなり活きがよい。

「そうれ、いくぞい？」

「だめっ、それは、いや……いやあっ」

粘膜の輪をきつく縛めて、どうにか泥鱈の侵入を防ごうとする。

「無駄じゃよ。お尻の孔は嫌がってはおらんよう」

武将達の雰囲気がつくりと欲望をそのまま剥き出したものへ変わっていく。

「こいつはいいッ、もつと過激なことをやれッ」

紫苑は配下の武将達の乱れていく様子を耳を通して感じながら、彼らが徐々にこの宴席のなかにたゆたう妖気に吞まれ始めていることを知った。

「そこまで皆様に乞われたなら、この女も本望でしょう。ですが、これ以上のことはさすがに人の域を超えるもの。しかしご安心下さいっ！」

ウウ……。少女は艶めく黒髪を掴まれ、無理矢理に引き起こされる。

「うむむ……………っ？」

何かを鼻孔に引っかけられたと思うのも束の間だ。

（な、な……………に、痛う……………何が、お、起きて……………っ!?)

身も心も脱力したところへの突然の衝撃に、少女は度を失う。

「人はダメでも、どうですっ！ この豚面、そして馬のものを口で頬張れるほどの変態ぶり。これは最早、人ではなく、家畜そのもの。家畜同士の交尾劇なら、どこの国においても許される演目でしようッ」

「ふわあ……………や、やめ……………やめふええええっ……………！」

鼻は痛みを感じるほどに強く吊り上げられてしまう。

「確かに牝豚と牡馬の交尾までは取り締まれない道理だぜ」

その立派な豚面と間抜けな喋りに、周囲がドッと沸く。

(め、牝豚…そんなこと言うな…：…言うな、言わないで…：…いや、こんな顔を…：…私が…
…ああ、皆の前で曝してしまふなんて！)

身体に突き刺さる視線は矢のように鋭い。しかし羞恥心を煽られているというのに、肉の割目は煮え滾って仕方がなかった。

まるで処女のように羞ずかしさが込み上げ、全身が鳥肌立つ。身体のなかを電流が過ぎようような顫えでたまらなく心地よくなってしまふ。まるで誰もいない草原を裸で駆けるような爽快な気持ちさえ込み上げる。

(私、み、見られて、か、感じてるっ、感じてしまっている…：…ッ)

込み上げてくる快美の肌を焦がすような感覚は、先程の比ではない。

自らの家畜そのものの醜い姿を忠実な家臣達に見られ、そしていつ自分の正体がばれるかも分からないこの状況。まるで死の淵を覗き見るような切迫したスリルが、まるで雷に打たれるような衝撃となって身体を襲う。

ジクジクと媚粘膜が燃え上がって、大腿部は愛液でびっちより濡れる。

「さあて、それじゃあ今度のお前の男を紹介しよう」

蹄が土を抉る音が聞こえ、少女はハッと顔を上げた。

(また、う、馬に奉仕しろとい、いうの…：…?)

このまま進めば、自分はやがて人としての道を踏み外してしまふのではないか。そして本物の獣になってしまふのではないか、そんな恐怖が脳裏を過ぎった。

「何をぼけっとしている。さあ、お前の男だ。ちゃんんと触ってやれっ」

腕をグイッと引き寄せられ、そして掌でさっきの馬よりずっと引き締まった体軀を触らせられてしまう。

さっきの馬とは比べものにならない。これが同じ馬なのかと思ってしまうほどの筋肉の盛り上がりと引き締めだ。そして掌ごしに感じる煮え滾るような熱い血潮の感触も、紫苑に畏怖の念を掻き立てさせる。

不思議と獣臭さは薄く、その代わり土埃の乾いた匂い、かすかに血潮の生臭さ、そして女性特有の柔らかな香りがあるのが分かった。

そして皮膚をチリチリと疼かせる鋭い闘気。

こんなすごい気迫を持った馬は一体何なのか――。

少女の頭のなかに疑問符が生まれ、やがてよく親しんだ感触に、腕がかすかに顫え始め、その顔に驚愕の影が差す。

「ひ、ひいおうう……ッ!？」

自分の愛馬に、情けない姿を曝してしまうことへの恥辱感が脳裏で閃く。

(そんな、アアアアア……いやああ……そんな飛凰の前で、私……わたしい……っ！)

血の気がみるみるうちに引いていく。

「ふふふ、そんなに嬉しがっているのか？ まあ当然だな。この馬はそんじよそこらの種馬とは訳が違うからな。紫苑様の愛馬であり三國一の荒馬、汗血馬だ」

少女は情けなくへっぴり腰になりながら、逃げようとする。だが汗を吸って重くなった布が分銅のようになって紫苑の動きを封じた。

さらに鼻にかかった返しもあり虜囚のように逃れられない。犀玉によつて鼻が吊り上げられれば、炎の如き恥辱に身を煽られて、汗血馬との性愛を強いられてしまう。

ブルルル、ヒヒヒ——ンンッ!!

汗血馬が天地を揺るがさんばかりに嘶き、その声が耳を劈く。

「やめて、飛鳳……私よ、……紫苑よ、お願い、やめて……私はお前の主なのよっ!」
誰も乗りこなすことができなかつた暴れ馬。それを唯一制御し、生涯の友として心を通じ合わせた紫苑。今その両者が身体をもつなぎ合わせ、禁断の関係を築こうとしているのだ。それはひどく滑稽で、とても残酷なこと……。

——無駄じゃ。お前の愛する飛鳳はすでに我が妖気によつて主のことなどとつくに忘れてしまつている。ホホホ、鍊月に続き愛馬も失うのじゃ。お前に味方する者はもう誰もいなくなるのじゃ。ハハハハ、お前は性欲人形として生きるのじゃ!!

頭のなかに潜り込んでくる悪魔の言葉に、少女は激しく頭を振つた。髪が捌けて、卑猥に汗をしぶかせる身体へ落ちかかる。

(ウソウソウソだッ!! 私と飛鳳の関係は妖夷なんかには邪魔されるほど柔なものではないっ! 私たちの絆はそんなものではない、そうだろ…飛鳳ッ)

少女は愛馬に語りかけるように触れようとする——しかし。

突然後ろからズンツと身体にかかる重量感に、悲鳴をヒュツと喉奥に吸い込んだ。

「ああ、な、なに……!?」

全身の筋骨がミチミチツ……と軋む。

ヒイン、ヒインツ!! 赤銅の体軀逞しい馬は鼻息を荒くしていた。

飛鳳がのしかかっているのだと分かると同時に、臀朶へグングンと押しつけられる熱塊。今まで身体に突きつけられてきた男の証のなかでも一際滾るその灼熱を前に、総身に恐慌の色が差し込んだ。

「さあ皆様、牡馬と牝豚の性愛ですぞッ」

「いいぞ、ヤレヤレツ」

「牝豚、しっかりと愉しませてくれよ！」

「ああ、牝豚……だなんて、やめて……やめ……む、ぐウツ」

牝豚——その言葉が、まるで暗示のように、抗い続ける魂を束縛する。

背徳の息吹が愉悅を運び込み、神に唾棄するが如くの禁断の予感に恐怖感がみるみるうちに成長してズツシリと女の精神を圧する。

「だめえ……飛鳳ッ! そんなの、竜王様がお許しにならない……な、ならない……ヒ
イアうううんつくうううッ……!」

どうにか説得を試みようとする紫苑。しかし相手が馬であることは勿論だが、すでに女武者の膺はぐちゅぐちゅに蕩けきって、いやらしく変貌してしまっていた。

陰部へ押し当てられた勃起は精力漲り、種族を越えて牝を屈服させる気概に満ち満ちていた。そればかりでない。主君にのしかかった悍馬は、褻肉口へ肉竿の先端を押し当てて、まるで女から喘ぎを搾り取らんばかりに焦らすのだ。

「ンナァア……はあつ、ああつ……飛鳳、熱い！ やめて、離れて、ひ、ひおう、そんなたくましいものを押し当てないで……ああーッ!!」

蜜壺へ押し当てられてはすぐに遠ざかる逸物。グチャグチャと陰部に絡みついた愛液が粘着音を立てて、泡立ちながら陰肉から噴きこぼれる。

「あああ、お、おつきい……ふうう……うん……うムッ……ムウウッ……」

愛馬の完全に欲望を満たさない巧みな腰遣いが、月宮の女の膣内に隠されている淫蕩の血を引き出そうとする。

（飛鳳、私に……わたしにやらしいこ、言葉を……いい……言わせるつもりなのッ!?)

汗血馬はそうだと言わんばかりに、今度は少女のこんもりと盛り上がった陰部に刻まれた淫裂へ灼熱を押し当てたまま、ズズッ……と割れ目に沿って擦りつけ、そのまま会陰を擦り、焦熱感を皮膚へネットリと張りつける。オネダリを求める牡の脅迫――。

（飛鳳、そんなにしたら、私、わたしい、ほ、欲しくなっちゃう……!）

「ん、ああ……ああ、太いい……ああ、そんな……ひ、ひどいい……うう、ひおうう!」
女武者は、まるで恋人へ媚びるように甘く唸ってしまう。

――さあ、言うのじゃ。月宮の姫よ。お前のやさしい粘膜はもう耐えきれぬはずじゃぞ。

獸姦欲求——人倫を蹂躪する恐慌姦が、紫苑の清廉だった心を黒く侵していく。

ヒィン……ヒンッ！ 馬は肉尻の割れ目を上り、そして淫唇と同じようにヒクヒクッと蠢く、排便孔にズンッとその先端を押し当ててきた。

「ああああああああ、そこ、そこ違うううっ……ッ!!」

腸内洗浄、そして異物挿入——その享樂的な背徳感によって責め抜かれたそこは、少女の身体のなかに穿たれた新たな性感帯として大輪の花を咲かせていた。水を含んだ綿のようにほっくりと膨らみ、妖しい緋色粘膜を惜しげもなく曝す。

(だめ、そこ挿れられたら、私はも、もう、お、お、おかしくなっちゃううっ)

紫苑にとって淫欲に囚われることは最も恐ろしいことだ。もしそんなことになれば、月宮紫苑という人間は破滅してしまうだろう。それならばいっそ、陰部に受けた方がいいのではないか。そんな欠陥にまみれた結論を出してしまう。

「も、もっとお……」

長い睫毛を瞬かせて、包帯に視界を覆われた空白の壁のなかで女は喘ぐ。

「もっとなににいつくください……お願いしますうっ……!」

ついに言ってしまったおねだりの言葉。

飛凰は歓喜するように嘶くが早いかな、遅しく発育した女泣かせの肉塊を、主君の肉門のなかへ突き入れた。こぢんまりとした肉髪は牡の気配を感じ取ると、大輪の花を咲かせるが如く広がりゴツゴツした勃起へ吸いつく。

「あああつ！ いいい、は、はいるう……挿入はっちゃううのおおおおおッ!!!」

夥しくも芳しい華蜜が潤滑油になって、ヌップッ、ズップッと猛々しい肉塊の侵入を助ける。美しく、脂肪によって柔らかく包まれた陰部に、牡馬の黒々と光る暴力的なものが合わさる情景は爛れた悪夢を思わせる一方、神秘的な画になった。

「あ、あ、あああああ、あつかあつ——ッ」

ぐちゅっ、じゅぐつ……ジユグ、ズググググウウウッ。

粘膜を切り開く、巨大体積の勃起に少女は声を搾られてしまう。だがその牝泣かせの逸物はずぐに抜き取られてしまう。

「ひいあアッ！ ぬ、ぬけえっ!？」

膣にできた空虚さに悶える。しかしそれも束の間、すぐに肉塊の圧迫感に目を剥く。

「ヒイン、は、はいる、おつつきいいつつ——!」

僅かな空虚さが混沌の渦を巻いた膣を拉げ、尾骨が砕けんばかりの衝撃と共に、襲いかかったのは菊孔。何も弄っていないのにそこは散々かき混ぜられた膣肉のように腸液で満ち満ちる。巨大肉塊が飛び込むが早いかネチユネチユと腸液が飛び散り、肛門を埋める肉鋼の衝撃が背骨を伝い、脳底を荒く削ってくる。

「おしりいい、いやあああああああ……!」

その絶叫は鼻にかかって、まるで砂糖を含んだような甘露さ。

事実肛門粘膜は、規格外な馬勃起をギッチリと挟み込んで、逃さないよう窄んでいた。

獸との交わりという背徳にまみれた行為で官能にまみれた身体が、直腸性交というさらなる異常性愛の相乗効果でさらに燃え上がる。行き止まりのない腸管をズッポリ埋めた馬根は内臓を突き破らんばかりの激しい突き込みを繰って粘膜を掻き巻く。

ズボツ、ジュブツ、ヌツプ、ヌツッポオオツ、ズツブっ!!

粘膜花弁がブワツと炎を噴き、紫苑は身を振って歎く。

「ひい、ヒイヒイヒイ……お尻、おしりい、……！」

腸内奥を指して突けば腸液と肉茎が擦れ合う粘着音が弾け、引き抜かれればいやらしい放屁音がブビ、ブッピヒイ！ とまるで豚の嘶きの如く酒宴に訝する。遊郭での調教によつて快楽点になつた腸肉を責め苛まれば、紫苑の意識はドロドロに冒される。

「いい……おしりいいの、いやらしい音ださないでえ……だすの、だめえ……ッ」

被虐の甘美が魂を呑み込んで渦を巻き、紫苑は身も世もなく煩悶する。腰を高く持ち上げ、羚羊のように締まった脚を思いつきり突つ張る姿は官能美の極致ともいえた。

「馬のちんぼなめたり、馬に糞孔犯されてよがったり……全く同じ女でも、我らの大将とは大違いだ、一体どこの下賤の生まれなんだ？」

武将達のそしりが、女の官能をさらに吊り上げた。どんどん引き上げられていく悦楽の曲線に、自分がどこまで墮ちていくのか知れず恐怖と凄まじい肉悦が身体のかなで混ざり合う。

ヒッヒイヒイヒイーン。飛鳳は涎を垂らして歡喜する。そして菊孔への一輪挿しを引き



抜いて、再び微痙攣する膣肉へ杭をぶち込んだ。

「ま、まらああああああ……!!」

全体重をかけての一直線の串刺しに、馬の勃起は子宮口を抉り貫く。

「———— ツツツツツツ」

子宮を通じて、一気に脳髓にまで悦びの電撃が送った。最奥を突き上げる壮絶な快感に呼吸が一瞬滞る。

そして刹那淫気に呑み込まれていた自我が僅かながら回復した。しかしそうかと思えば、液体の詰まった袋に小さな孔を開けられ、そこからゆっくりと溶液が流れていくように、圧倒的な悦びの影に隠れていた悔恨の念がジットリと滲み出す。燃れた布は褐色の肌を露わにさせ始め、右乳房の粒立ちを覗かず。巻きついた白布の隙間から覗く情景はより一層粘膜の妖しい色香を強めた。尻を包み込んでいた布はすっかりほどけて、なだらかな尻丘の膨らみ、くすんだ腸門を露わに、家臣達へ見せつけるような格好だ。

(う、馬とこ、交尾してる、私、すぐく気持ちよくなってるう……!!)

走馬燈のように脳裏を過ぎる、日の本一と称される荒馬を乗りこなした幼い日の情景、そして初陣で、敵に囲まれたところを飛鳳の機転によって切り抜けた思い出、様々な戦場を駆けめぐった時の、飛鳳さえいれば自分は無敵なのだと思えるほどの昂揚感——そんな煌めく小川のせせらぎのような思い出が瞬く間にどす黒く濁っていく。

ヒイイイン、ヒイイイッ!!

馬の嘶きが少女を走馬燈の逃避から現実世界へ引つ張り上げた。

「ほおおううああああ——ッ！」

杭打ちは粘膜全てを巻き込んで行われ、贅肉が楽々と抉られてしまう。少女は獣から与えられる悦びに足下を掬われる。

「や、休ませて……は、ハゲシィ……うむんっ……。見えちゃう、身体みえちゃう！」

乱暴な動きに、身体を縛っていた包帯がほどけ、竜の紋様が見え隠れする。

武将達も気づき始め、「こいつはいい、まるで姫様みたいな竜を身体に彫ってやがる！」やら「紫苑様みてえだぜ、そそるぜえ！」と美貌の女武將を凌辱している気分を味わいさらに盛り上がった。

（皆、私を、……そんな目で見ていたのかっ……）

家臣の裏切りめいた心の底を見せられ動揺する。しかし少女に休息はない。

ムチムチに肉づきのいい腰を、汗血馬の後ろ脚で締めつけられて固定される。当然に膣道もまた狭くなり、馬の陰茎をグツときつく噛んだ。水蜜桃のような張りと餅のような触感をあわせた尻肉が汗を弾けさせ、体液で下半身をドロドロに汚す。

「休ませてえ……ああ、ほんとうに……うう、身体こ、壊れちゃう……」

蜜蠟のような疲労感に、竜姫は喘ぎ混じりに懇願する——だが。

ヒィインッ!! 飛凰は紫苑の腰の振りが気に入らないのか。犀玉から受けとり口に啣えていた鼻掛けをグイッ! と上方に引き、女の鼻を吊って豚面を曝させる。

「アガガガガガッ、アガアアアッ——ッ!!」

鼻っぱしを思いつき殴りつけられるような激痛に、瞼の奥にチカチカと強烈な光が幾つも瞬いた。目尻にたつぷりの涙を浮かべ、痛みに顔面筋肉を引き攣らせるその姿は女ではなく、まさしく牝だ。

「ふわああああ、ふああい……振りまふう……お尻、お馬のおちんぼ、いっぱいし、締めマふからあ、鼻、ひ……ひいっばらないふええ……ッ!」

痛みから逃れる逃避なのか、それとも枯渴した大地に雨を降らせるが如く、少女の欲求を完璧に満たしてくれる肉欲への隷従なのか。紫苑はかつて御した馬によって、御されようとしていた。

そしてこの瞬間。理性の籜がバンッと弾け飛んだ。

まるで鳥もちのような愛蜜がビュヴ! と噴き出し、卑猥な照りに総身が包まれる。

「……ああつつかああああ、奥くるうつ……きひやうう」

かつて御した馬を御主人様に奉り、紫苑は視界の利かない世界で己の半裸を揉み搾る。布は褐色の艶めかしい身体の上で波を打ち、最初に比べればその弛みは一目瞭然だ。

辛うじてまつわっている布さえも汗に吸いついて身体の稜線を浮き上がらせ、いやらしく女体を搾りだしていた。

ズブツブツ! と激しい打ちつけに、子宮が抉り取られるかと思うほどの悦びが幾重にも弾ける。臀部が叩かれ、同時に被虐の快美を掻き立てられ、身体が媚熟によって焦げ

ついていく。唇から涎がこぼれ落ちる。

汗血馬は容赦なく再び鬣肉から愛液混じりの獣竿を抜くと、排泄孔へ挿入し、またも引き抜いて肉唇へと差し込んでくる。

「ああ、両方なんて、りようほういつぺんなんてえ、ああ、すごすぎイイツ……!?」
ニユツプウウ、ジュツプツズツ、ヌププウウ!!

「ううああいいい、飛風様のおちんぼ、素敵いいいいい、き、きもひい——ッ」
愛液と腸液が子宮内で混ざり合い、快美の毒が身体中をどす黒く蝕む。何度も抽送を繰り返された二つの孔は、まるで髑髏の眼窩の如くポツカリと開ききつていた。

「馬に様づけとは、とんだ女だっ」と武将が大いに酔った欲情の嗤いを漏らす。

「も、もつと、もつと飛風さまあ、ひおうう、うむ……うん……ゆ、ゆつくりいい……」
筋骨隆々として無駄な肉一つない締まった汗血馬の身体は逞しく、そして打ち込みはどこまでも妥協を許さず、女の最奥を突き上げ磨り潰す。鬣をまさぐり、腸内を抉り、子宮口を突き上げ、臓腑まで咀嚼してもおさまらない。

（私馬に犯されて感じてるう……おまんこも、ああ……お尻の孔までえ……だめなのにいい気持ちよすぎて、らめえ、顔ゆるんできちゃううう……!!）

突き殺されんばかりの激しさなのに、それがひどく頼もしく思えて仕方がなかった。

精力絶倫な逸物が肉壺をまさぐるたび、あまりの刺激の強さに思わず腰を引いてしまいうそうになる。しかしそれさえ、馬の後ろ脚によってガッチリと身体を固定された状態では

ままならず、悦びの底なし沼に身も心も包まれていくのだ。

じゅぶつ、じゅぶぶつ、ずぶぶつ、ぐぶ、じゅつぷううつ、ぶじゅううつ……！

膝で踏んばろうとしても足下に垂れ下がる布を踏みつけて滑ってしまう。全体の褐色の肉体が露わになるばかりか、汗で吸いついた白布が乳肉をさらに締めつけ肺腑の圧迫感に噎せ返った。

「ふあああああ、は、はげ、はげひいひい……ッ、ううう、らめえ、飛鳳さまあ、もつともつとゆつくり壊れる……ひいおんのおま〇こ、こわれるうう」

最早自分が家臣や国民を守るために身を挺しているのか、己の爛れた欲望を満足させようとしているのか分からなくなっていた。

「ひいひい、私の膣ああ、こ、壊れて、死ぬう……つ、突き殺されちゃうのおおおッ!!」
戦場では無敵の紫苑も、生物の本能的な戦いにおいて所詮はただの牝だ。

牝の子宮を喰らうが如く猪突猛進な精力の衝突には、生命の危機すら覚えてしまう。

「オウオウオウオウッ……!!」

と、ここにきて突然、飛鳳の抽送に変化が生じる。それまで子宮口を突き上げ、最奥から入り口にかけての粘膜を抉るようにしていたのを、勃起の先端を子宮口へ押しつけ、腰をねじ込むようにグググッと重点的に責めてきたのだ。

「はあああきやあああああああああ——ッ!!」

女の最も弱い部分に、馬の何十貫もの体重をのせられる。このまま身体のなかに孔が開

をくねらせると脅迫せんばかりに鼻をグイッと豚鼻にさせられてしまう。

「は、はいいい……！ わ、わかりまひふああ……うごきまふう、うごきまふからあ!!」
紫苑は強烈な隷従を呪縛の如く身体に植えつけられて、痙攣する粘膜の間をがち割る勃起のために腰を揺する。

（あああ、こんなの、ひどい……ああ、ダメ、強い、強すぎるうう……こんなの死ぬ……でも、嗚呼でもこれ、たまんない……）

通常よりも神経が研ぎ澄まされた絶頂直後の粘膜を攪拌されるのは、痛みにも似て、今にも心臓が止まらんばかりだ。しかしまるで禁断の常習作用のように女を虜にしてしまう。いや、女ならばその魂の内に持っている強い牡への平伏感情が強く刺激されて、虜にならざるを得ないのだ。

「ほらほら、豚は豚らしくブヒブヒ言えってんだよっ！」

獣に犯され、悶え喘ぎ、気をやらされ、そして決して身体の弛緩を許さない、女の美貌を破壊するおぞましき吊上具に翻弄され——少女は自分が一匹の牝豚になってしまったように感じられてならなかった。

「ハハハハ、そうだけ。馬に気をやらされちまう女なんて見たことねえぜ、糞豚女さっさともつと感じやがらねえかっ」

信頼していた家臣達の面罵が耳を穿つ。牝豚という響きが一種の魔力的な妖しさを持って、身体を舐める。ゾクゾクッと身の毛もよだつような背徳感に悦びが生まれてしまう。

「そこまで馬のちんぽが欲しいのかっ……あははははっ！」

男共の嘲笑いが、紫苑の精神に淫蕩の膜を張る。

煮込んだ肉のように蕩けた子宮口を突破し、飛風の巨根が子宮内にまで侵入を果たした。その瞬間ミチミチッと股関節が嫌な音を立てて、全身に飛風の重量感がズシンッと響く。胎内いっぱい甘美な酩酊感がゾワゾワッと轟き渡った。

(なかあ、大事なところには、はいっちやつたああああ……す、すすぎるう……うううううん)

メラメラと淫欲が燃え上がり、もう引き返すことはできない獣道に迷い込んでしまう。

「ふわああ、いひゃいぶひ、ぶひ、いひゃいでぶひい……！」

ヒッヒ——ンッ!! 巨根がきつく縛められ、悦びの声を上げるように飛風は嘶いた。「ぶひっ、ぶひ、ぶっひい、ぶっひいい……っ！」

子宮を貫き、完全に肉体を飛風に捧げてしまった紫苑は、喉が哽れんばかりにけたたましい濁声を上げる。倒錯感情が身体のあちこちで連鎖爆発を引き起こし、牝豚の卑猥な身体を艶めいた体液で彩っていく。

(すごいすごいいい……馬の、飛風のおちんぽ、スゴイ……)

瞳は茫と潤み、唇は阿呆に開き、鼻は女性の恥ずかしい鼻奥までをも見せびらかさなばかりにそそり立つ。

ヒヒイインン!! 快感に弛んでいた五感を叩き起こすかのような間近での激しい嘶き。

少女は目隠しされた状態でも、自分に近づく複数の馬の気配を悟る。

(なに？ なにをするの……っ？)

目の見えない恐怖感が迫り上がり、紫苑は左右に首を振った。

「ぶっひ……ぶひい……ああ……うングウッ!?」

突然頭をガッシリと左右から押さえつけられる。それが馬の屈強な脚であり、そして今唇を突き刺すように抉るのが、馬の巨砲であることを知るが早い。一気に喉奥まで貫かれ、ブルッブルッと痙攣じみた胴震いが奔った。

「ぶひい……ンチュチュパッ……!?」

口腔を掻き分ける肉槌の衝撃に、細く泡立つ唾が紅唇から横溢する。それはまるで無我夢中で餌を頬張る豚の如き顔。

「んっうぶうううるるう……んちゅ、チュッツペアッ!」

ほとんど無意識に舌を動かし、頬をこけさせ女は淫棒を舐め清める。根元までミッチリと嵌められて、唇は捲られ、頭のなかに快美が渦を巻いていた。

「おひい……ぶひ……ぶひぶひっ……!」

さらに手に無理矢理ねじ込まれる熱い血潮の感触。ドクドクッと脈を打ち、さらに身体にのしかかってくる蹄の鋭さに身体が悲鳴を上げる。

「ぶっきいいい——!?」

紫苑は牝豚の如き鼻音を鳴らしながら、両手で陰茎を抜き、馬茎を頬張り、舌を絡めて

ケダモノ輪姦の淫獄の虜囚に墮ちていく。

「んぶうつ……ぶひ……ぶひ……ぶひ……ぶひ……ンフウウウウウ……！」

涎とも、馬の体液とも知らない濁った液体で唇をぐしよぐしよに湿らせ、それでも勃起を貪欲に口で磨き上げる。獣臭さが全身に染みつき、そしてそれがまた快楽の爆発を誘発した。

「ンツツツンブウウウウ!?」

今まで以上の汗血馬の突き上げに、内臓ヘグラッと激震が迸る。そこかしこでたるんでいた布が次々とほどけて褐色肌を曝し、紡錘形の乳房の輪郭は勿論、ツンと屹立した片乳首の緋粘膜も覗けた。

ヒヒヒヒヒヒヒヒ—— イイイイイイイイイイイイイン!!

今まで聞いたことがないほどの猛々しきで飛凰が鳴いた。

他の馬で感じるな、そう言わんばかりに飛凰は噛みしめた鼻掛けの紐をグッと引き上げて、自分の元へ主を引き寄せ、より深く子宮肉を扶った。股間を隠していた布は勢いに引きずられて解け大腿部に絡み、ぱっくりと馬陰茎を啜えた節操のなさを露わにする。

「ぶっひいああああああ—— ツ！ あああ、飛凰、私は飛凰様のモノです、ぶっひい……ごめんらひゃい、他の馬で感じてごめんなひゃい……ぶひい!!」

子宮を貫く肉茎の抽送運動が滾りを益々加熱させる。陰部を隠す布は完全になくなって、太腿に絡んだ布が、横溢してくる秘蜜を浴びて変色し、ぐっちより湿っていた。



(たまんないたまんないたまんないのおおおお……!!)

ぶひぶひぶがぶがと鼻を鳴らし、少女は身も世もなく喘ぎ狂う。馬の漏らす体液で手が汚れ、身体を包み込んでいたほとんどの布は薄汚れて足下に纏わる。乳房に絡みついた布はいささか張りついてはいるものの、片乳首は完全にそのすごい充血の具合を覗かせていた。

「ふが、ふがああ……ぶひいい、ぶひ、ぶっひいい……！」

竜王の化身は馬達の絶頂の気配を悟った。全身を嘔みしめる勃起の群がみるみるうちに膨れ、全身を射抜く強烈な肉塊の攻撃も加速度的に激しさを増す。

ズブ、ズブ、ズブッ！ 子宮をそのまま胎外へ引きずり出さんばかりの貪欲な抽送に、全身の水分が愛液に変換されたかと思うほどに汁が噴き出してやまなくなる。馬の乱暴でありながら、牝を熟知した律動は紫苑の身も心もよがらせ、柔褻全体を痙攣させた。

やがて遊牝の昂奮が悦楽の炎となった次の瞬間、全身を襲うのだ！

ドビュルルル、ビュリユユユユユ——ッ！ ビュンビュビュ、ビュッキ
ユルルルルルウウウウウウウウウウウ——ツツツツツツツツツツ!!!

女の身体に穿たれたありとあらゆる孔のなかを浸食する獣液。

「ぶひぶひぶひいいいい、豚女、ぶっひぶひ……もうら、らめええ、ぶっひいいいいいいいい……っっっ」

それはまさに大洪水というべき恐慌で、女の理性はその怒濤の前では赤子同然に押し流

されてしまう。

視界を覆っていた目隠しまで弛み、僅かに家臣達の熱狂に蕩け、自分を見る顔が覗けた。
(だめだめだめえ、私……も、もう……お、おかしく、おかしくなるうう……ああん、
こんなの、た、たまんない………つ)

炸裂する意識のなか。ありとあらゆる感情、様々な感覚が入り交じり、螺旋を描いて極彩色の破片となって脳裏に散らばる。

紫苑は白目を剥いて、泡を噴き、アへ顔を曝して昏倒した――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>